

2018年度 政治学入門 A 最終試験講評

今回の問題文は下記の通りでした。

〔問題〕

ラスウェルの政治的無関心の類型について、講義の内容を踏まえつつ、具体例を挙げながら、480字以上1920字以下で説明しなさい（配点70点）。

なお、解答はパラグラフ・ライティングの形式によること（配点30点）。

〔注意事項〕

◇解答が480字（解答用紙で16行）に満たない答案は0点とする。なお字数の計算方法については下記の〔解答用紙の使い方〕も参照のこと。

◇箇条書きの答案は0点とする。かならず文章形式で解答すること。

◇誤字・脱字・文章表現の誤りなどは、すべて減点の対象とする。必ず「見直し」をすること。

◇この問題用紙は持ち帰ること。

〔解答用紙の使い方〕

①「見出し」をつける場合、そのつど、用紙の1行ぶんを使うこと。なお見出しに関しては、実際の字数にかかわらず、ひとつあたり1行（＝30字）と計算する。

②その他は、大学入学までに習得してきた「原稿用紙の使い方」に従うこと。字数の計算も、一般的な作文や小論文と同じ基準に従っておこなう（例：段落冒頭の1字下げによる空白や、段落末尾の空白部分も字数に含める）。

③以上①・②に関する質問は受けつけない。

1. 答案の作成方法

最初に「今回の試験では、どのような手順で答案を作成すべきだったか」について、講義でも説明した「論文答案の作成方法」に即して、検討することになります。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

今年度の設問は、きわめてシンプルです。講義で説明した「ラスウェルの政治的無関心の類型」について、説明するだけです。この点について悩む余地はほぼないかと思えます。

ただし設問文をよく読むと、4点ほど気をつけるべき点があります。どれも「あたりまえ」のことですが、ひとつめは当然ですが「解答者であるあなた」が独自に考えた「政治的無関心の類型」を幾ら書き並べてもダメです。「ラスウェルが提示した分類法」を、正しく説明しなければなりません。

つぎに解答は「講義の内容を踏まえている」必要があります。講義で紹介した参考書などでも、ラスウェルの政治的無関心の分類については言及されています。しかし解答に際して要求されているのは「講義でその点についてどのように説明されたか」です。したがって自分自身の認識や、他の教科書に書かれていたことを記しても構いませんが、少なくとも講義の中で言及されたことには触れなければなりません。

さらに、答案の作成に際しては「具体例」を挙げなければなりません。単にラスウェルのタイプの定義を、抽象的に書くのみでは、題意を満したとはいえません。

最後に、答案は480～1920字で、かつパラグラフ・ライティングの形式に則していなければなりません。とくに注意事項に明記したとおり、480字に満たない答案や、箇条書きの答案は、自動的に0点となります。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

解答に含むべき「論点」については、講義レジュメの19ページを参照して下さい。答案では、これらの内容を順序立てて記述するのですが、今年の問題に関しては「いかに内容を膨らませるか」が重要になります。講義でも、この部分の説明にはあまり時間を割いていませんから、ポイントだけを書き並べても480字には届きません。よって具体例も含めたうえで、なにをどう取り上げるか、きちんと書き出し、しかも論点に洩れないよう、十分に注意を払うべきです。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

つづいて「何をどのような順番で書くか」「どこでパラグラフを分けるか」「どの論点にどの程度の字数を使うか」などを考えます。これらの諸点について、答案を書きはじめる前に、時間をかけて検討することで、最後にできあがる答案の「読みやすさ」や「全体としてのまとまり」、あるいは「論点ごとの分量のバランス」が、まったく違ってきます。反対に、これらの検討をおろそかにしたまま、漫然と答案を書きはじめてしまうと、「思いつくままにダラダラと書き並べたような答案」になりますので、高い点数（評価）は望めなくなります。

なおこの点については、今年からパラグラフ・ライティングの形式を義務づけましたから、あまり悩む必要はなくなったかもしれません。この形式（具体的には次項④を参照）に則して書くことで、だれでも一定水準の答案が書けるはずです。

④実際に答案を書く。

パラグラフ・ライティングの手法については、講義で配布・説明した補助レジュメを参照してください。なお後述しますが、採点に際しては、とくに下記の点を重視しました。

- I. 答案の冒頭（第1文目に）に、結論がきちんと書かれているか（10点）。
- II. 各パラグラフの冒頭が、トピック・センテンスになっているか（10点）。
- III. 第1パラグラフ（総論）が、答案全体の要旨になっているか（10点）。

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

- I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずですが。しかし残念ながら、誤字や脱字を理由に、減点した答案も少なくありませんでした。
- II. また「日本語として意味が通らない答案」も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。こちらも当然、減点対象となります。

いずれにしても重要なのは、「問題文を見て、その場で思いついたことをダラダラと書き並べても、0点（これは比喩ではなく、本当に0点です）しかつけられない」ということです。あくまでも政治学入門という科目の最終試験ですから、「もんだいぶんをよんで、じぶんのかんがえたこと」を書くだけでは、合格点は絶対に取りません。

2. 最終試験の採点

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

- I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。
→前記「答案の作成方法」に記した通り、「講義の内容を踏まえて」「具体例を挙げつつ」「480文字以上」かつ「文章形式で」解答していないものは、そもそも採点の対象にはなりません。
- II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。
→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、次回から「答案構成」をきちんと考えたうえで、解答を書き始めるようにして下さい。
- III. 答案全体、および各パラグラフが、パラグラフ・ライティングの形式を踏まえているか。
→答案の冒頭（第1文目）に「結論」が書かれていない答案は、それだけで大幅減点です。また各パラグラフの冒頭に、トピックセンテンスが置かれていない答案も、減点となります。具体的にどう書くべきであったかは、次項と末尾につけた解答例を参照してください。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているかをチェックし、点数化しました。

I. 内容面：必要な論点が揃っているか。またそれぞれの論点について、きちんと説明されているか(70点)。これについては、講義レジュメに挙げた(あるいは私が口頭で説明した)ラスウェルの政治的無関心の類型について、どれくらい網羅しているかが重要です。簡単にいうと、まず「脱政治的態度(脱政治的無関心でも可。以下同じ)」「反政治的態度」「無政治的態度」の3つの概念が、用語とともにきちんと挙げられていれば25点。2つだけなら15点、ひとつだけなら10点としました。

つぎに、各パラグラフにおいて、上記の3つの態度の定義(説明)が正しくなされていれば、それぞれ10点となります(計30点)。さらに、それぞれの態度について、具体例まできちんと挙げられていれば、各5点加点しました(計15点)。これで25点+30点+15点ですから、70点満点となります。

II. 形式面：パラグラフ・ライティングの技法に則しているか(30点)。

これについては、上記の通り「答案の冒頭(第1文目に)、結論がきちんと書かれているか」「各パラグラフの冒頭が、トピック・センテンスになっているか」「第1パラグラフ(総論)が、答案全体の要旨になっているか」を調べて、各10点を配分しました(合計30点)。もちろんパラグラフ・ライティングの技法はもっと複雑で、上記の3つを満しているだけで満点は甘いのですが、皆さんがまだ1年生であることなどを考慮し、甘めの採点となっています。

そして、ここから下記の諸点について減点してゆきます。

III. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分ありますから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなり、全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。また書き終わっていない「未完結の答案」についても、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

IV. 「基本的なミス」を犯していないか。

たとえば「政治的無関心」の意味そのものが判っていない答案に、合格点をつけることはわざわざ困難です。また、それぞれの類型の内容や特徴を、根本的に誤解しているような答案も、基本的な知識に欠けていると判断して、大きく減点しました。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、それぞれ減点しました。

こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいます学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えてください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。今回、とくに目についた誤字としては「距絶(正しくは拒絶。以下同じ)」「政治体勢(政治体制)」「指示政党(支持政党)」「投票(投票)」「次第(次第)」などがあります。さらに「無感心(無関心)」という誤字も散見されましたが、そもそも問題文に書いてある漢字を、そのまま答案に書きうつすという、小学生レベルの作業すらできていないという点を重視して、通常より大きく減点しました。

④その後、加減点などを合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでS評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にSがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、メールで連絡をもらえれば、随時対応します。私のメールアドレスはウェブサイトを書いてありますので、そちらに連絡をください。

3. 成績分布

①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布（政治学入門A・B合算後）

S : 6.2% A : 11.2% B : 11.2% C : 10.5% X : 32.9% F : 27.9%

②最終試験受験者における成績分布（同）

S : 8.6% A : 15.6% B : 15.6% C : 14.5% X : 45.7%

4. 解答例

次ページ以下を参照して下さい。なお、以下に示すものはあくまでも「解答例」であって、この通りに書かねばならないわけではありません。とくに2については、いろいろな予想があり得る以上、そのぶん、さまざまな解答例が存在するはずですよ。

経緯で、政治と距離をとる事例を、ラスウェルは「反政治的態度」と呼んだ。

4. 無政治的態度

無政治的態度とは、政治とは私にとって重要な問題ではない、という相対的な価値観から生じる態度のことである。人は生業や家庭生活のほか、趣味や娯楽などにも多くの時間と精力を割いている。これらの問題と政治を比較したうえで、前者を重視し後者を軽んじるところからも、政治への無関心は生じうる。具体例を挙げると、ある人物（C）が、衆議院総選挙の投票日と、自分の大好きなアーティストのコンサートが重なることに気づいたとする。Cはただちに「自分にとり、選挙はそれほど重要な問題ではない」と判断し、投票を棄権してコンサートに行ってしまった。このように、政治と他の問題を比較したうえで、政治は私にとって重要な問題ではない、という相対的な価値観により政治から距離をおく態度を、ラスウェルは「無政治的態度」と呼んだのである。

5. まとめ

以上の、政治的無関心に関するラスウェルの3分類のうち、脱政治的態度は「挫折」、反政治的態度は「拒絶」、無政治的態度は「無視」というキーワードで理解することができる。現実社会に存在する、政治に関心をもたない人々の態度を正確に理解し、その対策を考えるためには、まず、このような類型を念頭に置くことが重要であろう。

以上